# 會報

# I

1934

# 一、談話會報告要旨

六月七日　（第一回）

## 本邦米作に就ての二、三の考察

村木達郎

(A)　本邦に於て米作が重大であり且盛大となれる理由。

(一)　我國の地理的條件。

我國は大部分溫帶に含まれ、暖流に洗はれて居る故に、高溫であり、又季節風帶に位置し、幅狹く而かも高峻な山脈が縱走してゐる爲に多雨である。米作には高溫多雨なることが必要である。

然し高溫多雨ではあるが、稻が我國に自生してゐたかは又別個の問題である。通說では稻の原地は熱帶即ち印度方面であって、本邦の如き比較的高緯度の地方に原生したものではないらしい。

その傳來に就ては、大和民族渡來の經路も明かでない今日では單なる推測に止まるが、地理學上から見て、北支那或は朝鮮などの地方で一旦溫帶の氣候に馴化された稻が輸入されたと見るのが穩當であらう。

(二) 食糧品としての米の優越性。

我國に於ける單位面積よりの農作物收穫量中に含まるゝ總熱量では、米は甘藷に亞いで高位にあり而かも甘藷と異り、蛋白質も豐富で、永い貯藏にも耐え得るし、輸送にも便利で、主食品たる諸條件を具備してゐる。

(三) 集約農業上より見たる稻作。

食用作物の耕地利用率が一〇五パーセントにも達し、集約農業をせざるを得ぬ我國の現狀では、裏作として、麥、馬鈴薯等の栽培を可能ならしむる成熟期間の比較的短き稻の如き作物が有利であり必要でもある。又稻は実例によってみても、單位面積からの收穫量に発展性が多い。

(四) 傳統の力。

古來米を重要視した結果、技術上に於て世界に冠たるものがある。

(B) 内地に於ける稻の二期作に就て。

食糧問題解決方法の一つとして、内地に於ける稻の二期作が考へられる。現在内地で稻の二期作が行はれてゐるのは、沖縄縣、高知縣及鹿兒島縣の一部であるが、これはもっと擴張し得るであらう。

現に鳥取、埼玉その他の諸縣でも研究してゐるし、埼玉縣二郷半領の早稲、及熊本縣に於ける藺草栽培の爲の稻の晩化等の例からしても、これは空想ではない。水が豊富であり、四月半より十一月半まで平均氣溫十二度以上である、關東以西の表日本及山陰地方の平坦部に於て可能であらう。

## 等時線圖の作圖上の諸問題

織田武雄

等時線圖も亦他の人文地理圖と同樣に、圖の機能を滿足せしむべき要素を取捨選擇する基圖を基礎として作圖される。即ち等時線圖の場合に於ては、所謂交通地圖が斯る基圖として選ばれる。縮尺は特殊な場合を除けば、大体五〇万分ノ一の程度を以て最大の限度と看做し、投影法は正積乃至正主距投影法を用ふべきである。而してその基点は一般に港湾、大都市の停車場の如き交通生活の中心とも云ふべき地点に置かれるのであるが、若し斯の如き点が一箇所に多數集合せる場合は、適当な作業を加へる。時間距離の決定に際しては、平均値の問題が考慮される。即ち Wagner, Schott, Paul の等平均旅行時間は水上交通に、Riedel, Blasinger の交通の頻繁度を加へた平均時間は大都市近郊交

通に限らるべきであつて、一般の等時線に於ては、平均値は除外される。等時線の描図法は、基点より夫々の所要時間に到達した諸点を線で結べばよいのであるが、唯鉄道等時線図の場合には、各駅が又夫々の中心点となるから、描図法も亦多少異つた方法を用ひねばならない。

## 大津京條坊に就て

米倉二郎

天智天皇の大津京に就ては従来大津市北の錦織村小字御所ノ内がその遺跡であるとされてゐた処、喜田博士はその北方の滋賀里荒ノ内を以て京趾とされ、更に滋賀縣史、大津京趾の研究に於ては中間の南滋賀村正興寺附近の遺跡を之に当てた。又條坊に就ては喜田博士が假定説を立てられたのみで一般にその存在を疑はれてゐた。報告者は不完全ながら大津坂本間の條里を復原し之に立脚して御所ノ内を以て皇居趾に推定し、條坊は尚之を明かにし得ないけれどもその存在は畧之を認むべきであるとなした。その詳細は考史と地理七月号に発表された。

六月二十三日　（第二回）

# 大東諸島の經營

岩根保重氏

一會社の開拓・植民として注視さるべき、日本製糖會社の大東諸島（ラサ島・南北大東島）の經營

地形　隆起珊瑚礁、環礁湖遺跡、池多し。農耕に適。

氣候　冬期霜雪を見ず　夏期も東京大阪等大都會に比し凌ぎやすき事

動物　植物

人口　北大東島二千人　黒糖一万五千把

南大東島四千五百人　分蜜糖十万樽

官吏七人、從業員百人、勞働者四百四十人

島治　治安は巡査により保たれ、小學校郵便局電燈の施設あり、失業者なし。

開發　以前は全島密林なりしを明治三十二年八丈島人玉置氏開拓に成功し甘蔗を栽培、後東洋製糖を經て現在日本製糖の經營となる。

交通　大阪―門司―大東島―東京　汽船年十二回　沖縄との間には會社の傭船あり。

（これは当日突然「日糖最近二十五年史」に據りて報告せられたるものである）

（文責、野間）

# 本邦セメント工業に就いて

三田生　谷　剛　梅　亀

手近な資料からのスクラップでもある点をお断りしておかねばならない。

ポルトランドセメントは現代土木事業に必須の材料であり、我國に於いても列國に劣らぬ良品が多量製造せられ重要産業の一つに指定されてゐる、現代のセメント工業が資本主義社会に於ける経済生産の一つである以上當然それは利潤の獲得が第一の目的とされてゐる筈である。その目的の為に工業立地の場合に立地因子が作用して立地は空間的制約を受け、且つ一定の場所、即利益ある場所に指向するものである。セメント工業の立地因子は、原料の價格及その運送費、勞働費、製品運送費であるが、原料の價格と勞働費は軽視し得べく、立地は大体運送事情のみに據って定まると見てよい。二九〇斤のセメントが製造されるには石灰石三二〇斤、乾燥粘土一〇〇斤、石炭九〇斤等の原料を要す。然れば石灰石と粘土が同一地点に産すると、其處が立地となり、若し斯る産地がなく各原料が別處に産出されても原料産地、消費地に於ける各分力は断然原料産出地、就中石灰石の夫が強い。唯、旧時の湿式法の場合には河泥産地の分力が大であったが、現今では港湾近くの存在は運送上の利益あることが主因と

なった。

分布状態。大都市は勿論、山間僻地に於いても大土木工事が行はれる故に、セメント消費地は普遍的である。本邦では純度の高い良好な石灰石が廣く全國に分布し、粘土は更に一層普遍的である。故に本工業は工場の数は少いけれども全地方に存在す。二十八を算する該工場の分布状態を菊田氏は立地形態により三種類に分別した。

1. 京浜、阪神、名古屋等消費中心地に集りて原料産地と遠く隔たってゐるもの、
2. 北九州に密集せるもので、原料は近在し販賣は遠い消費中心地又は國外に對して行はねばならぬもの、
3. 全國各地の原料産地に點在し、周囲の地方に供給するもの、

第三類のものは堅実な小売商店に似て、立地論上最合理的なる事は同氏の言を俟つ迄もない。

發展略誌。日本に於いてセメントの見られたは明治以後である。即ち、税関統計最初の輸入記録は明治三年であり、日本製品の初めて現はれたるは同八年五

月である。之は産業の開発を極力奨励した當時の政府が、明治四年、深川に設立したセメント製作研究所に於いて試に製造したのである。次いで十四年五月に、世運の狀勢を洞察して山口縣下小野田に民營製造所設立され、附近に原料豊富なる爲此の地が選ばれたものである。前者深川製作所は官營の模範工場として斯業の先駆を成した。後者はそれに見倣ふ最初の工場にして、合理的に立地が行はれたる民營の營利会社の嚆矢として本邦セメント工業史の第一頁に特筆さるべきものである。

是より機械々々とセメント製造所は創設され、各社の競爭始まり、技術的進歩も次第に加はるに至った。

## 日蘭會商と蘭印の資源

中野竹四郎

昭和五年の一月より三月まで、蘭印方面の市場を詳細に視察され、その際の調査、感想を興味深く話し下さったものである。日蘭会商が非常に問題となってゐる今日、斯る報告は興味深く、且つ大いに參考となった。

爪哇は火山多く、地層は主として第三紀で、肥沃である、高度により氣温が相

違するから砂糖、米、コーヒー、茶、キナ等の栽培が高さにより配列される訳である。爪哇には雨期と乾期とがあるが、この際注意せねばならぬは中央及び東部にあつては雨期が明瞭で、この事情が砂糖栽培に好都合に作用し、從つてこの方面に多くの砂糖工場が設立されてゐることである。是に対して西部は降雨が年に於て前者よりは平均し、茶或いはゴム等の栽培に適してゐる。砂糖、ゴム、或はコーヒー、茶にしても爪哇は世界的有数の生産地で、砂糖の産額は世界第二位、コーヒー、茶は第三位、ゴムも世界の[illegible]%を産出してゐる。茶の栽培されるは海拔二千尺より六千尺で、その栽培も機械使用の大規模なものである。日射の充分な場所等では一年に二十数回も摘める程である。解熱藥として重要なキニーネは海拔五千尺から七千尺の高度に於いて栽培さる。蘭印の石油は爪哇にも産出されるが、半分以上はボルネオ東海岸よりで、其に次ぐはスマトラである。

爪哇の人口は約六〇七三萬人、一方粁の密度は三一七人を示し、まづ飽和狀態と言へよう。外國人としては六十三万人の東洋系人（大部分は支那人）、アラビヤ人、西洋人は主に和蘭人であるが、その数十九万人である。

（文責　近藤）

# 二、教室日誌

## 本年度講義題目

### 普通講義

| | |
|---|---|
| 石橋　教授 | 人文地理學概説 |
| 中村(新)教授 | 自然地理學概説 |

### 特殊講義

| | |
|---|---|
| 石橋　教授 | 水上交通地理 |
| 小牧助教授 | 日本地誌に於ける地域区分 |
| 小野　講師 | 近世の地圖學 |
| 春本　講師 | 地形學 |
| 岡田　講師 | 地理環境としての氣候 |

### 演習

| | |
|---|---|
| 石橋　教授 | 内外地誌演習 |

### 実習

石橋　教授　　地理學実習

四月

會員遠藤金英氏逝去に就き弔電を発す。

四月二十六日

新入會員歓迎會を三島亭にて開催す

出席者。先輩　藤田、岡本、遠本、別枝、松井、吉田の諸氏。

研究室　小牧先生、米倉、織田両氏、學生一同。

五月

昨年卒業の室賀信夫君は「日本地理學史」なる研究題目のもとに大學院に入學さる。又本年度卒業生にして大學院入學者及び研究題目は次の如くである。

安藤　鏡一　　人口地理學

大橋　英男　　人口増減の地域的研究

近藤　忠　　本邦地名の地理學的研究

朝永　陽二郎　　農業地理學

山口　平四郎　　交通地理學

尚神戸商大本年度卒業の伊藤勝作君は「經濟地理學」研究の爲め大學院へ入學さる。

五月十六日

次回發行の地理論叢第四輯編輯会議を開く。並に第五輯原稿締切九月十五日と決定す。

五月二十三日

岡田博士、特殊講義

五月二十四日

岡田博士、特殊講義。尚講義終了後楽友會館に於て、石橋教授主催の岡田博士歓迎会を行ふ。

出席者　先輩　田中(秀)、藤田、小野、滝本、別枝、松井、辻田の諸氏

研究室　小牧先生、米倉、織田両氏、學生一同

五月二十五日

小牧助教授　春本講師引率のもとに紀州方面へ二回生研究旅行に出發。

五月三十日

一同歸洛

六　月

六月七日

談話會開催

研究報告

本邦米作に就ての二、三の考察　　村本達郎

等時線図の作図上の諸問題　　織田武雄

大津京條坊に就て　　米倉二郎

出席者、先輩　中野、田中(秀)　両氏

研究室　小牧先生、米倉、織田両氏、學生一同。二十八名

六月二十三日

談話會開催

研究報告

大東諸島に就て　　岩根保重

本邦セメント工業に就て　谷淵　梅雄

日蘭會商と蘭印の資源　中野　竹四郎

地理學に対する雜感　小田内　通敏

出席者、先輩。中野、田中(秀)、岩根、遠本、別枝、松井、室賀、辻田、吉田敬の諸氏。

研究室。小牧先生、米倉、織田西氏、學生一同、三十三名。

尚小田内氏は突然教室を訪問されたが、偶ミ談話会開催中なりしため挨拶を兼ね所感をのべられた。

六月二十七日
二十八日
二十九日　岡田博士、特殊講義

七月

七月二日

日本大學地理學教室より教室參觀の爲め小池氏來訪さる。

## 三、研究室雜記

米倉二郎

一、圖書や備品の整理は研究室永年の懸案であつたが四月來大學院學生諸君の應援を得て着々進行中、

二、石橋教授三月來病床に親まれ今尚吉田二木松の御宅で靜養さる、

三、小牧助教授は砂丘の研究を益々續行され他方先史時代遺跡による海岸線の変化を全國的に調査さるゝ筈、

四、今年度卒業生で東京市に奉職された今村新太郎君は四月結婚された、

五、昭五、卒、太田喜久雄君は中耳炎にて入院加療中の処過日全快退院された、

六、廣島文理大西洋史科を今年卒業された鈴木福一君は近日中大學院入學を許可される筈、研究題目は「人文地理學」

七、考古學教室末永氏の依頼に應じ日下草遺君他二回生三名は七月七日より約一週間奈良縣吉野郡宮滝遺跡の測量に從はるゝ筈、

八、台北商業に赴任された朝井小太郎君は今後台湾砂丘の研究に專念さるゝとの事、又今夏は新高に登山さるゝ由、台南中學に赴任された内田勲君も同様新

高山登山の予定、

「談話會名簿訂正」

| 誤 | 正 |
| --- | --- |
| [redacted] | [redacted] |
| 滿洲教專教授 | 教育研究所講師 |
| | 入江久夫 |
| | 内田勤 |
| [redacted] | [redacted] |
| | 吉田秀則（旧姓有川） |
| [redacted] | [redacted] |
| | 松井武敏 |
| [redacted] | [redacted] |

## 後記

始めての事として滿足なものが出來ませんでした。特に急いだためリーフレットの題名等も當方で勝手につけました。種々御意見、希望を賜はれば幸ひに存じます。

地方在住先輩の通信は多くありませんので主として教室の事をお報せする事になりました。暑中休暇の收穫を二學期には是非談話會で御話を願ひ、又今後消息していたゞき度いと思ひます。

先日申送りました通信費二十錢未だお送り下さらぬ方は御面倒でも出來るだけ早く願ひます。

（幹事）

昭和九年七月

京都帝國大學文學部地理學教室

地理學談話會

京都市丸太町通熊野神社頃入
甲文堂印刷
電話上五一〇三番